

小山発展の基礎を築いた夫婦

小山市中央1丁目、思川左岸の堤防沿いに武士の夫婦像が建っている。二人は、小山市役所庁舎を背にして西の方をみている。石碑名は「小山政光寒川尼像」とある。二人とも中世の歴史上の人物で、夫と妻が並んで立っている姿は非常に珍しい。

小山政光(以下政光と略)は、その名の通り小山に住み着いた豪族である。その昔、今の小山市域に「寒川御厨」(別名「小山荘」という荘園があった。寒川に住んでいた政光の妻は「寒川尼」と呼ばれるようになった。

二人の功績が石碑の裏側に書かれている。碑文の内容を全国的な視点で見れば、次のように言えるだろう。「源頼朝が日本の歴史上、初めて、武家の力で鎌倉に開いた『鎌倉幕府』の成立に多大な貢献をした」。

地元目線で見れば、郷土の誇りと映る。鎌倉時代の小山氏は、祇園城(別名小山城)を拠点に「関東屈指の武士団」として、その地位を確立した。政光は、その小山氏の祖として

「400年にわたって栄えた」小山氏の基礎をつくったと言える。

妻の寒川尼は、鎌倉幕府の事績を記録した歴史書『吾妻鏡』に登場する。中世の世で女性が歴史書に記録されるケースは極めて稀だ。いったい、寒川尼は何をしたのだろうか。『吾妻鏡』文治3年(1187)12月の条(項目)に次のような記述がある。

「今日、小山七郎朝光が母(下野大掾政光が後家)ニ、下野国寒河郡并ニ網戸郷ヲ給ハル。コレ、女性タリト雖モ、大功アルニヨリテナリ」。女性ながら大きな功績があったので領地を与えた、という。しかし、この文章だけでは「大功」の内容がわからない。

そのヒントとなる記述が『吾妻鏡』の治承4年(1180)10月の条にある。「今日、武衛(頼朝)御乳母、故八田武者宗綱ガ息女(小山下野大掾政光ガ妻、寒河尼ト号ス)鍾愛ノ末子ヲ相具シテ、隅田ノ宿ニ参向ス。則チ御前ニ召シテ、往事ヲ談ゼシメ給フ」と書かれている。

小山政光と寒川尼

なんと寒川尼は、頼朝の乳母だった。二人の年齢的な点から実際は「養育係」、平たく言えば遊び相手だったようだ。だから昔を懐かしんで話がはずんだのだろう。しかし、それだけではなかった。寒川尼は、その場で連れてきた末子を「頼朝の側で奉公させて欲しい」と頼んだのである。

当時、夫の政光は、地方武士が交代で行う京都の御所警護の任務(大番役)にあっていた。京都は平家が支配している。頼朝はその平家を倒すために挙兵した。その中で息子を頼朝の側近くに仕えさせて欲しい、ということは、私たち(小山一族)は頼朝側に付くと伝えているに等しい。

頼朝に付けば、京都の夫にどんな危害が加えられるか。そんな不安の中、寒川尼は、留守を預かる身として一族の帰趨を決めなければならなかったのだろう。その決意の現れが、愛しい末子(後の結城朝光)の出仕を願うことだった。この判断が、小山氏にとって的を

射た選択だったことは、歴史が示す通りである(文中敬称略)。

主な参考文献

『小山市史通史編I』(昭和59年、小山市発行)、『小山市史研究第二号』(昭和54年発行)、『乳母の力歴史を支えた女たち』(田端泰子著、平成17年、吉川弘文館発行)など。



市のイメージアップにつなげようと、平成22年(2010)に建立された小山政光と寒川尼の夫婦像
=小山市中央1丁目(筆者撮影)

偉人から読み解く「懸ける時」のヒント

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一